介護ロボット

サンヨーホームズ㈱執行役員
ライフサポート事業部長　細井　昭宏

人に優しく〝寄り添う〟時代

もはやロボットによる介護を拒むことは出来ない。〝ロボットには細かなところが伝わらない、人のぬくもりが無い〟などと言っていられる時代は終わりを迎えるでしょう。なぜなら介護してくれる人がいなくなるからです。仮にいたとしても、介護従事者を希望しない若者や生産世代に求め過ぎることは、夢を奪うことや経済活動の低下を招く恐れがあり、現実にいま社会問題化しています。「いやいや世界から人手を補えばいいじゃないか」、短期的にはそうかもしれません。しかしこの話はもはや時限付きとなってしまいました。世界のあちらこちらの国で人口減少が起っているからです。中国では2022年にすでにピークを迎えています。現在多くの介護従事者を日本へ派遣しているベトナムでも今後数十年で急速に高齢化すると予想されています。世界に先行し2004年に人口減少に転じた日本があっという間に少子高齢化の課題を抱え込んだように、世界も同じ課題に直面し、日本のことなどかまっていられない状況となるのは容易に想像できます。

まあこんな暗い前置きはこの位にして、こんな状況なんだから〝ロボットと楽しく向き合うためにはどうしたらよいか〟を考えるほうが明るい未来が待っている気がしますよね。

きっと日本主婦連合会の皆様はそんな風にお考えの方が多いのではないでしょうか。今年6月4日、渕上会長様を含め8名の方が私の開発する介護ロボットを豊中市北緑丘にある施設に訪ねて頂きました。意見交換の際には皆様の経験談をお話しいただく等、私たちも大変勉強になり有意義な時間を過ごすことが出来ました。今回この紙面がきっかけに、お越し頂けなかった皆様とも、一緒に考える機会に繋がればうれしいです。

ところで介護ロボットというと、皆さんはどんなイメージをお持ちでしょうか。ベッドが動いて起き上がることを支援してくれたり、電動付きの歩行器が外出をサポートしてくれたり、トイレの立ち座りを手伝ってくれる機器でしょうか。鉄腕アトムの様な人の形をしたロボットを想像される方もいらっしゃるかもしれませんね。現在このようなロボットは移動支援・移乗支援機器として、介護される側とする側の両方の立場で開発が進められています。

見学頂いた「寄り添いロボット」は、これらのロボットとは違い〝何もしてくれないロボット〟です。ベッドからの起き上がりも、歩行も、トイレの立ち座りも、何も手伝ってくれません。唯一出来る事は〝転倒のスピードを感知するとブレーキをかけ柔らかく転倒させる〟ことです。逆にいうと自分の力を最大限に引き出すことを目的としたロボットです。

では何故このようなロボットを開発したのかお話しします。ベッドから起き上がる、歩く、トイレに行く、これらは出来れば一人でやりたいこと思う方がほとんどです。しかし転倒し骨折するかもしれないという恐怖や家族への遠慮があると、次第に動くことが億劫になり、足腰の能力はやがて低下してしまいます。もし転倒しても大きな怪我をしないと分かっていれば、自分ひとりでやってみようと思うはずです。このように「寄り添いロボット」は〝人に勇気を与えるロボット〟として開発しました。

私は現在、建築、介護、ロボットに携わっています。だからこそ感じることが出来る幾つかの体験を紹介いたします。

一つ目は、人の優しさが事故につながったという悲しい出来事です。介護事業所でサービス担当者会議という、介護利用者本人と家族、ケアマネージャーとの打合せをしていた時のことです。お母様が夜中にトイレに行った時に転倒してしまいました。娘さんは「どうして一人で行くの、私を起こしてって言ったじゃない」、それに対しお母様は「あなたも仕事で朝が早いじゃないの、寝かせてあげたいのよ」。二人の互いを思いやる気持ちに感動するとともに、自分にも何か出来るのではないかという強い思いが生まれ、寄り添いロボット開発のきっかけとなりました。

次は、住宅の温熱環境による健康影響です。渕上会長が理事をされ私も参加する「健康・省エネ住宅を推進する国民会議」が示すように、家の暑さ寒さが体調不良や行動変容を起こすことが指摘されています。実際、ご自宅への訪問時に断熱性が悪く床が冷たいなど感じた家に暮らされている方が、トイレで倒れられ救急搬送される事故がありました。ほんの少しのアドバイスがあれば危険を回避できたかもしれません。

最後に介護現場でよく交わされる会話を紹介します。ある職員が「Aさんは、昨日転倒され腰椎骨折のため明日から3か月お休みです」。すると別の職員が「最近、疲れやすく歩行バランスも悪かったから、転倒すると思ってたのよ～」。わかってたら早く言ってよと思うのですが、職員は確信が無く言い出せないのです。そういえば街中で娘さんがお母様に、大丈夫？疲れてなあい？休もうか？と目を見つめ、手を握りながら言葉をかけるシーンをよく見かけます。これくらい〝寄り添う〟と確信できるのでしょうね。

このような経験を踏まえ、「寄り添いロボット」には、転倒による怪我の防止だけではなく、娘さんの代わりに話しかけたり、歩行バランスや呼吸、脈を測ったりする機能が備わっています。もし危険が迫っていそうなら、家族にお知らせします。また住宅の温熱環境を勘案し、事前に行き先となる廊下や洗面の寒さをお知らせすることで事故を防止します。これらの取組により〝細かなところが伝わり、ぬくもりがあるロボット〟として皆様に認められることを目指しています。

日本はこれから社会保障費の抑制のため、在宅での医療介護を進めていきます。これを背景に国立長寿医療研究センターや豊田地域医療センターといった病床を持つ医療機関は、病院内に住空間を再現し、様々な自立支援ロボットを体験できる施設をつくることで在宅でのロボット導入支援を行っています。また藤田医科大学、東北大学、九州工業大学は、近未来のロボットが連携し合い人をサポートする研究が進められています。実はこれらすべてに「寄り添いロボット」が導入されているんですよ。他にも九州から東北までのリハビリテーション病院やデイサービスを中心に活用頂いてますが、これから住宅へと本格展開してまいります。

住宅メーカーが開発するロボットであるからこそ、家族の絆が深まり、優しさと思いやりに溢れた暮らしを実現する、そんな〝人とロボットが寄り添える時代〟を実現していきたいと思います。是非、日本主婦連合会の皆様との交流の場が訪れることを願っております。